

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第117回 (2018.12.4) の要旨

拝読文(『真宗聖典』63頁)

心の所欲に随いて経戒を虧負して人の後にあることを得ることなかれ。もし疑いの意ありて経を解らざる者は、具さに仏に問いたてまつるべし。当にためにこれを説くべし。」

弥勒菩薩、長跪して白して言わく、「仏は威神尊重にして、説きたまうところ、快く善し。仏の経語を聴きたまえて、心に貫きてこれを思うに、世人実に爾なり。仏の言うところのごとし。今仏、慈愍して大道を顕示したまうに、耳目開明して長く度脱を得つ。仏の所説を聞いて歓喜せざることなし。諸天人民蠕動の類、みな慈恩を蒙りて憂苦を解脱せしむ。仏語の教誡、甚だ深く甚だ善し。智慧明らかに八方・上下・去来今の事を見わして、究め暢べたまわざることなし。

「心の所欲に随いて経戒を虧負して人の後にあることを得ることなかれ。」

この心は、煩惱の命を成り立たせている心です。それが欲するところに従い、経戒を虧負する、と。仏教では、戒ということが、五戒(不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒)として言われています。それ以外にも沢山の戒が教えられて来ていますが、そういう経戒を虧負する。虧という字は、欠席の欠という字と同じ意味、負は、負けるという意味です。そこには、仏陀の教えを失って、煩惱の生活をしてしまうという問題が起こるわけです。そして、「人の後にあることを得ることなかれ」。つまり先に行く人の後ろに居るといふ、そういう在り方に立つことがあってはならないということです。つまり、これは何を言おうとしているかと言うと、仏法に遇うということは、一人ひとりが本願力に出遇うという時の先端に立つのだと。人にそのことを任せて自分が後ろに立つということは、仏法の利益を失ってしまう、教えの内実を変えてしまう、そういうことを教えているのではなかろうかと思うのです。

一人ひとりが本当に先頭に立つという覚悟が生れるのが、「信の一念」に立つということなのです。自分はまだどうも、というような遠慮が仏法を聞く姿勢を障げる。だから、「後にあることを得ることなかれ」という言葉は大変な言葉です。

「もし疑いの意ありて経を解らざる者は、具さに仏に問いたてまつるべし。当にためにこれを説くべし。」

疑いの心があり、経文の意味、意図がよく分からないならば、つぶさに仏に問いなさいと。つぶさは、具という字が書いてあります。具はそなわるといふ意味もありますし、具体的なという意味もあります。或いは具現、現実的にといふ意味もあります。そういう本当に問うべき問いを仏に問いなさいと。そして、「当にためにこれを説くべし」。お互いの心を大きな縁として仏法を聞きなさいというお勧めだと思えます。

「弥勒菩薩、長跪して白して言わく」

弥勒菩薩が、長跪合掌そして五体投地、頭を下げて身を捧げて、仏さまの前に帰命の姿勢を表わす、それを長跪と言うのです。長くひざまずくと書くのですが、この長くは時間のことではなくて、身も心も仏の前に投げ出すというような姿勢を表わしているわけです。

「仏は威神尊重にして、説きたまうところ、快く善し」

威神尊重の威神という言葉は仏を讃える時にしばしば出てくる言葉です。威神力とも言いますが、神という字は精神、心という意味を持った字です。たましいという意味にも使います。『無量寿経』に開神悦體という言葉がありますけれども、心を開くと読みます。身体が悦ぶということの先に、心を開くとい

うことがあります。心を開けば身体が悦ぶというのが、仏法の利益なのです。

威というのは猛々しいという意味があって、非常に強く、そして激しく勝れている有様を表わすのに使われます。仏陀をほめるときにそれを威神という言葉で言うわけです。私は威神尊重である。威神というのは、威張っているという意味ではなくて居られるだけでもう人が悦服する力を持っている。だから尊重、尊く重いと。威神尊重にして「説きたまうところ、快く善し」と。説きたまうところが、凡夫にとって、一切衆生にとって快く聞こえてくるのです。

「仏の経語を聴きたまえて、心に貫きてこれを思うに」

仏が説きたまう教えの言葉、経の言葉を聴きたまえて、と。このたまうは仏さまを尊敬して使うたもうではなくて、聴きたまうですから、聴くのは、仏の言葉を聴いている側です。それに敬語表現がつく。たもうというのが、尊敬語でもあるし、謙讓語でもあるのです。現代語で言えば、聴き奉るといような形でしか言えないような内容です。弥勒菩薩が、弥勒菩薩の言葉で言っているわけです。仏の言葉を聴いて心に貫きてこれを思う。心に貫きてというのは、その前にあった心と同質的な心、まだ覚りが開かれていない心、つまり煩惱の心。そういう心に貫いてこれを思うということです。

「世人実に爾なり。仏の言うところのごとし」

惑業苦ということがあります。惑というのは、無明を表わす、惑いを表わす言葉です。そして業は行為、惑いから起こる行為、その行為がまた次の時間に悪い結果をもたらしてくるということを悪業というわけです。その結果、苦悩が引き出されてくる。だから苦悩が起こる原因は、行為であり、行為というのは、身口意の三業です。仏教では、身体で現わす行為だけが行為ではない。口も、心もふくめて三つの形で現れるのが行為です。仏教では心に思うことがもう罪なのです。身口意の三業共に罪業深重であると、こういう言い方がなされるわけです。

「今仏、慈愍して大道を顕示したまうに、耳目開明して長く度脱を得つ」

ここでは弥勒菩薩と釈迦如来との出遇いですから、そういう出遇いのところに今、仏が慈愍して大道を顕示したまう、と。慈愍という言葉ですが、慈愛の慈はいつくしみと読む字で、愍はいたみと読む字です。痛みとか、哀しみを表わす字で、慈悲と近い言葉です。慈悲をもって大道を顕示したまう。人類普遍の救いの道を大道という言葉で言っておられるわけです。慈悲の心、慈愛の心をもって一切衆生の救いを顕そうとするのです。そして耳も目も開かれると。仏のお言葉を聴いて、現実的には、智慧が開かれるという事実があるわけですが、それをあたかも世界が明るくなるが如くに感ずる、光が来たと表現するのです。そして、度脱の度は、済度とか、六度とか言うときの度です。脱は、解脱ですから、煩惱や、苦悩から脱するということです。人生の苦悩を、ある意味で仏法に触れるという形で突破出来る。そういうことを、仏教的超越というなら、仏教的超越というものを度脱という言葉で言うわけです。それを親鸞聖人は、自分で度脱しようとして度脱するのではない。凡夫に光が来る形、本願力に摂取される形で横ざまに度脱するのだと、こういうふうにお考えになって表現なさったわけです。

「仏の所説を聞いて歓喜せざることなし」

仏の教えに出遇ってそれを聞いて歓喜しないことはない。歓喜というのは、信心歓喜の歓喜です。歓もよろこぶ、喜もよろこぶという意味です。歓の字について親鸞聖人は、出遇うべきことに出遇って涅槃に至ることを確信するというよろこびを歓という字で表わすのだとおっしゃいます。獲得すべきことに出合ったという未来を感ずる字です。「うべきことをえてんずと、さきだちて、かねてよろこぶころ」（真宗聖典 P539、P535）と、親鸞聖人は注釈されますが、それが歓の字です。慶の字は、同じよろこびだけれども、獲得するべきことに出合い、獲得したというよろこびをあらわします。

ですから歓喜ということは、過去の闇を離れて未来の光に入って行くというところに立てるといふよろこび、それを歓喜という言葉で表わしておられるのでしょう。

「諸天人民蠕動の類」

大変面白い言葉が出てきます。この諸天人民までは、天も人も一応人間の在り方を言うのですけれど、ウジ虫や、ミミズ、あるいは蛇のような、ぐにやぐにや曲がりながら生きているようなものを蠕動という言葉であらわします。蜻飛蠕動という言葉もありますが、そういう蜻飛蠕動の類いもこの功德に遇うのだと。

これは譬喩的表現ですけれど、人間だけが特別勝れているとか、そういう発想をしない。もちろん人間でなければ仏法には触れられない。仏陀の教えを言葉として聞くことが出来なければ、能く分かりません。仏陀が人間の真実を言い当て、苦悩の源泉を掘り当て、そして明るみにする道を開いて下さっている。そういう言葉が聞こえないと我々は救われないわけです。しかし、仏法では、仏陀の法を聞く世界には、あらゆる衆生が寄ってきて聞いているのだという表現があります。そしてこの大悲の本願の呼びかけは、十方衆生がたすかる道であるという教え方です。だから決して人間だけが偉いのだというような発想はさせない。こういうところが仏法の善いところではないかと思うのです。

「みな慈恩を蒙りて憂苦を解脱せしむ」

先ほど慈愍とありましたが、慈愍に応えての慈恩です。慈しみの恩、出合ったものにとって恩徳と感じられるということです。恩徳讃に「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし」とありますが、つまり恩として感じられるようなものが、慈恩、慈しみの恩です。如来大悲から与えられる恩を蒙りて憂苦を解脱せしむと。憂いや苦悩から解脱できる。解は、解放の解です。身が苦悩から解かれるということです。脱は、脱出の脱、煩悩から脱するということです。小乗仏教は煩悩からの解脱というのが、解脱の内容らしいのですけれど、大乘『涅槃経』の解脱、大解脱という問題は単に煩悩からの解脱ではない。煩悩と言っても表に現れる、六識に現れる煩悩だけではないのです。唯識で言えば、末那識に付属するような自我の煩悩、我痴・我見・我慢・我愛と言われるような我の絡んだ煩悩があります。そういうものは、表に現象しない。表に現象するときには違う形の瞋りとか、腹立ちとか、そねみとか、妬みとか、そういう形で出てくるのです。我痴・我見・我慢・我愛というのは、表には出ないでおとなしくしているのが根本問題である。どれだけ表におとなしい人間でも、我痴・我見・我慢・我愛というものを持っている訳です。

憂苦というのは、憂いと苦悩です。これは三毒五悪段を通じてこの憂いという字が貫いてあるということを以前指摘しました。そういう憂鬱感というのは、なかなかしつこいものです。この憂いという字を日本語でうれいと読むわけですが、憂という字は、単にうれうだけではないかも知れません。静かにして、しかしなかなか除き難い哀しみではないかと思うのです。そういうものが、憂という言葉で言われる。その憂苦を、憂いの苦しみを解放して超脱せしめるのだと。こういうふうに言っておられます。

「仏語の教誡、甚だ深く甚だ善し」

そして、ここに大変大事な文字、教誡という字が出てきます。親鸞聖人は、この文字に着目されました。『教行信証』の「化身土巻」で、この文字を使って「化身土」という土が開かれる意味を表わそうとなさいます。

化身土巻に「聖道・浄土の真仮を顕開して、邪偽・異執の外教を教誡す。如来涅槃の時代を勘決して、正・像・末法の旨際を開示す」(真宗聖典 P358)とあります。

聖道・浄土という二つの門は道綽禪師が決判しました。それまでは、聖道・浄土ということは、一つの道として、浄土という教えも、聖道仏教、自力の仏教の一角に置かれていたのです。道綽禪師は中国の三国六朝の時代の方です。王朝が次々と壊れて行くという時代にあっては、もう正法の時代の教えは役に立たない。もう浄土の教えのみだと、大悲の本願を信ずるのみだと決断なさって称名念仏を勧めて下さった。これが道綽禪師のお仕事です。

聖道・浄土の真仮、どちらが真実でどちらが仮であるのかということをも明らかに開き、そして邪偽・異執の外教を教誡するという。邪偽、異執、つまり人間の思想、自我の見があって営む思想というものは、ど

れだけ論理的に立派そうに見えても、自我の迷いが覚める道ではない。そういう道が外教である。仏道以外の道である。そこには、自我の見と、そこから生み出された様々な執着というものが出てくる。それを教誡すると。外教を教えさとして導き入れる為に教えが開かれるのだと。こういうことが、実は、「化身土巻」の課題なのです。教誡という字は末巻でもう一度使われます。

清沢先生は、今拝読しておりますいわゆる三毒五悪段と言われる段を、三毒五悪という押さえでは物足りない。この全体が善悪段であると、善と悪とを教え教誡するという段なのだとおさえています。三毒五悪段だと文字通り煩惱の在り方だけを説いていることになる。その中に、何故、「願生安楽国」などということが出てくるのだと。ここに経典の持っている大事な意味があると読まれたから、これは善悪段と読みたいと問題提起をして下さっているのです。一般的には、三毒五悪段で通用するけれども、ある意味でそれは一面的である。『無量寿経』が本願を説くのは何の為かと言えば、五濁の世の苦悩の衆生を救わんが為であると。こういう発想があるから、清沢先生は善悪段と読むわけです。

「智慧明らかに八方・上下・去来今の事を見わして、究め暢べたまわざることなし」

去来今、去は過去、来は未来、そして今、つまり三世という言い方がありますが、世というのは、時間を表わします。三つの時というのは、過去の時、未来の時、そして今という時です。しかし実際、過去は現在の記憶あるいは記録されたものでしかない。未来はまだない。予測あるいは予想でしかない。そういうこと両方を成り立たせるのは今である。現にあるのは、今のみです。しかし、その今は、刹那主義的今ではない。刹那主義的今は過去も未来もを否定して今だけだと言うがそうではない。やはり、分水嶺、つまり山の両側を見渡しながら境目に立っている。今というのは、過去の終わりであるし、未来の始まりである。そこに今生きている。生きているという事実は、常に今である。過去のことは記憶、思い出すことは出来るけれども、思い出すのは今である。未来のことを予想するのは今である。双方、今なのです。今を救うということは、親鸞聖人がおっしゃる「信の一念」ということです。

臨終でたすかるのだというふうに行って行くのは、やはり今が分かってないということなのです。大切なのは、今なのだ。今日今時を除いたら、それは単なる妄念でしかないわけです。死ぬ時には、きっと迎えが来るだろうなどということは、妄念でしかない。

仏陀の智慧は八方、十方とも言いますが、あらゆる方角も、そして去来今、三世十方の在り方全部をみそなわして、究め暢べたまわざることなしと。

文責：大谷一郎（親鸞仏教センター嘱託研究員）